

- (2) 本剤は眼科用に使用しないこと。  
 (3) 使用時にはよく振り混ぜ、均一な懸濁液として用いること。  
 (4) 注射時の注意

筋肉内注射にあたっては、組織神経などへの影響を避けるため下記の点に配慮すること。

- 1) 注射後、注射部位をまもまないこと。注射液が脂肪層に逆流し陥没を起こすおそれがある。
- 2) 神経走行部位を避けるよう注意して注射すること。
- 3) 繰り返し注射する場合には同一注射部位を避けること。なお、乳幼児にはなるべく投与を避けることが望ましいが、やむを得ず投与する必要がある場合には慎重に投与すること。
- 4) 注射針を刺入したとき、激痛を訴えたり血液の逆流をみた場合には直ちに針を抜き、部位をかえて注射すること。

**全身療法：**筋注の部位は腎筋が適する。投与間隔は症例により異なるので、症例毎に症状の再発する最少期間を選んで投与する。維持量についても症状の軽重により適宜増減する。

小児に対しては年齢、体重、症状によりなるべく必要最少量で治療すること。

**局所療法：**局所(関節腔内、軟組織内、腱鞘内、滑液囊内、鼻腔内、副鼻腔内、鼻甲介内、鼻茸内、喉頭・気管、中耳腔内、耳管内又は食道)に注射又は注入する。

小児に対しては病巣の大きさにより適宜減量して投与する。

本剤は1回の局所注射又は注入で効果がみられる場合もあるが、数回の注射又は注入を要することもある。なお、効果持続は症状により異なり、また、投与回数を重ねるにつれて延長する傾向があるので症状が再発したときに投与を繰り返すこと。

関節腔内注射の場合、関節に多量の関節貯留液があると薬剤がうすめられて効果が減弱するので、穿刺により十分排除すること。

本剤は関節腔外へ誤って注射又は注入すると、全身作用を及ぼすと同時に局所への効果が減弱するので、留意すること。

腱炎、腱鞘炎、腱周囲炎などで腱鞘内に注射するときは、腱組織へ入らぬように投与する。

なお、本剤は水性懸濁注射液のため比較的太目の注射針25G(1/3)、23G(1/2)を使用すること。

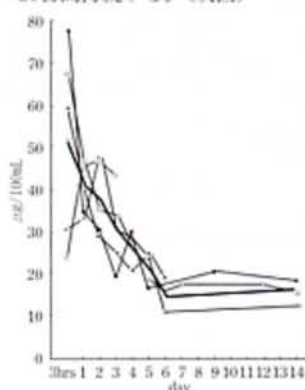
## 9. その他の注意

副腎皮質ホルモン剤を投与中の患者にワクチン(種痘等)を接種して神経障害、抗体反応の欠如が起きたとの報告がある。

## 【薬物動態】<sup>1)</sup>

### 1. 血中濃度

肝及び腎機能に異常のない、乳癌患者5例にトリウムシノロンアセトニド40mg及び<sup>3</sup>H-トリウムシノロンアセトニドを筋肉内投与した時の血中濃度は、5例の平均値では3時間後が最高濃度で51.7µg/100mlを示し、以後6日目には15.2µg/100mlまで漸減し、7日目より14日目まではほぼ同程度の濃度が得られ、有効血中濃度は14~21日間持続する。(次図)



トリウムシノロンアセトニド筋注時の血中濃度推移

## 2. 排泄

<sup>3</sup>H-トリウムシノロンアセトニド及びトリウムシノロンアセトニド40mgを筋注した乳癌患者4例の尿中排泄では、投与量の12.5%が第1日目に尿中に排泄され、その後の排泄は極めて少なく7日間で16.5%が排泄されたにすぎない。

## 【薬効薬理】<sup>2)~4)</sup>

トリウムシノロンアセトニドは糖質代謝作用、抗炎症、抗アレルギー作用が強く、しかも鉱質代謝作用が弱いためナトリウム、水分の体内貯留に基づく浮腫などが少ないという特長を有する。コルチコイド活性に関する動物実験(ラット)から抗炎症作用、胸腺退縮作用、肝グリコーゲン貯留作用が明らかにされている。また、副腎摘出ラットの延命効果、作用の持続時間、皮膚透過性においても優れている。

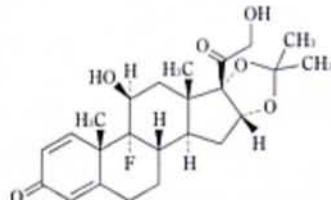
## 【有効成分に関する理化学的知見】

一般名：トリウムシノロンアセトニド

(Triamcinolone Acetonide)

※化学名：9-Fluoro-11β, 21-dihydroxy-16α, 17-isopropylidenedioxyprogna-1, 4-diene-3, 20-dione

※構造式：



分子式：C<sub>28</sub>H<sub>38</sub>FO<sub>6</sub>

分子量：434.50

※性状：トリウムシノロンアセトニドは白色の結晶性の粉末で、においはない。エタノール(99.5)、アセトン又は1,4-ジオキサンにやや溶けにくく、メタノール又はエタノール(95)に溶けにくく、水又はジエチルエーテルにほとんど溶けない。

## 【包装】

筋注用ケナコルト-A 1mL×10バイアル

## 【主要文献及び文献請求先】

### 主要文献

- 1) Kusama, et al. : Metabolism 20(6), 590(1971)
- 2) 勝 正孝他：新薬と臨床, 15, 15(1966)
- 3) Ringler, I., et al. : Proc. Soc. Exp. Biol. Med. 102, 628(1959)
- 4) Lerner, L. J., et al. : Ann. N. Y. Acad. Sci. 116, 1071(1964)
- 5) Lerner, L. J. : Clin. Med. 73(5), 53(1966)

### ※文献請求先

ブリistol・マイヤーズ株式会社 学術情報室  
 (住所) 東京都新宿区西新宿6-5-1  
 (TEL) 03-5323-8355

®登録商標

弊社では、本剤のほかに関節腔内用・皮内用ケナコルト-A(10mg/1mL)を販売致しております。

※



販売元 **ブリistol・マイヤーズ株式会社**

輸入元 **ブリistol製薬有限会社**  
 東京都新宿区西新宿6-5-1